

研究ノート

岩手県岩手郡滝沢村大釜館遺跡出土の宇田型甕について

井上 雅孝・早野 浩二

岩手県岩手郡滝沢村大釜館遺跡出土の宇田型甕について、その詳細を報告する。宇田型甕は伊勢湾沿岸地域からの搬入品であることが推断され、東海における松河戸Ⅱ式に相当する。東日本における宇田型甕の出土はごく限定的であるが、これらは古墳時代中期前半における技術拡散、物資流通に付随して搬入された可能性がある。また、続縄文土器と東

北地方の弥生土器・土師器との併行関係を整理し、宇田型甕が帰属する松河戸Ⅱ式が続縄文土器の北大Ⅰ式、南小泉式に併行することを確認した。大釜館遺跡の宇田型甕には、古墳時代中期前半の東北地方北部をより動的に把握する必要性を示唆する重要資料としての位置が付与される。

I. はじめに

東北地方北部に位置する岩手県岩手郡滝沢村大釜館遺跡において、伊勢湾沿岸地域から搬入された古墳時代中期の宇田型台付甕（以下、宇田型甕）が出土していることが明らかとなった。小文は、その詳細を報告し、派生する若干の問題について考察を加え、北方交流史における重要な一資料としての位置を求めるものである。なお、小文は井上と早野が検討した内容を踏まえ、I、VIを両者、II、III-1を井上、III-2・3、IV、Vを早野が主として執筆し、全体を早野が調整した。

II. 大釜館遺跡と周辺の遺跡

大釜館遺跡の周囲には、雫石川左岸の河岸段丘（好摩・雫石段丘）に沿って、約5km下流に宇田型甕（またはS字状口縁台付甕、以下、S字甕）が出土している盛岡市宿田遺跡（後述）、約3km上流に5世紀後半の須恵器が出土している岩手郡雫石町仁沢瀬Ⅱ遺跡が分布する。その他遺跡の周辺には、滝沢村大石渡遺跡・大石渡Ⅴ遺跡、同仏沢Ⅲ遺跡、同高柳遺跡、盛岡市安倍館遺跡、同永福寺山遺跡等、古墳時代の土器と続縄文土器を出土し、同文化に深く関係する遺跡が多数分布する（第1図）。

III. 大釜館遺跡出土の宇田型甕について

1. 遺跡の概要と遺物の出土状況

大釜館遺跡は、岩手県岩手郡滝沢村大釜字外館地内に位置し、雫石川北岸の河岸段丘上に立地する。北緯39°42'21.67"、東経14°04'31.67"付近にあり、標高は138.7～139.6mを測る。

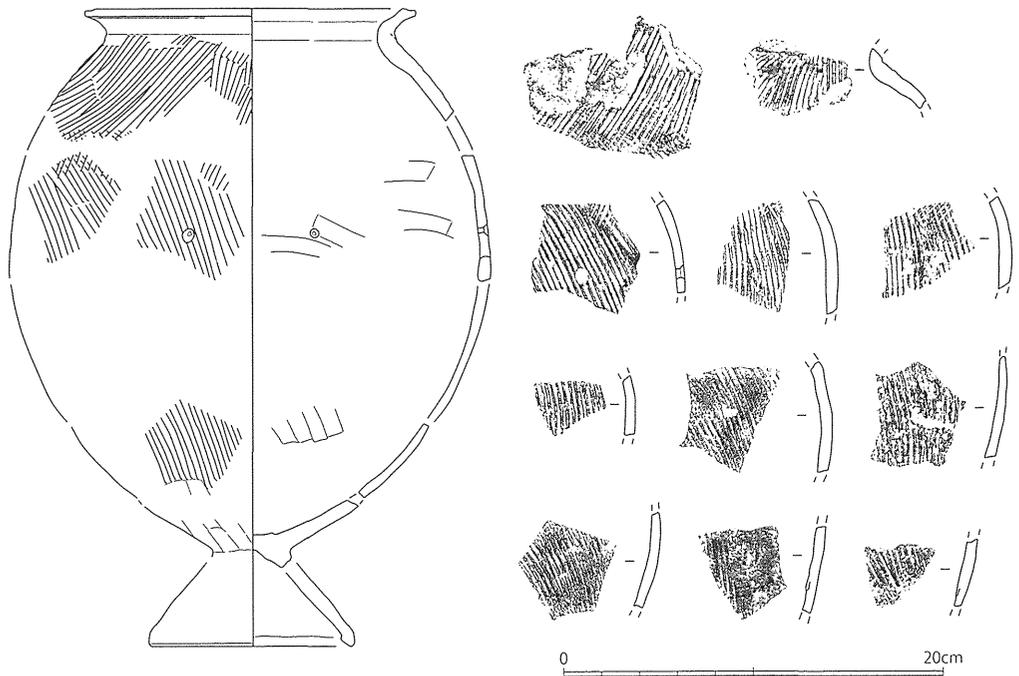
発掘調査は、1987年から1995年の9年間にわたって滝沢村埋蔵文化財センターが実施し、

甕形土器の系譜を引く、「伝統的な煮沸用器種」としての位置が与えられた(巽 1975)。その後、赤塚次郎による「宇田型台付甕」に対する基礎的な把握を経て(赤塚 1988)、その呼称と一般的な理解が定着した。

大釜館遺跡において出土した宇田型甕は、口縁部、頸部から体部上半、体部下半、脚台部の破片からなる(第2図)。これらの破片は、質感から同一個体と判断され、約1個体分に相当する。個体を観察した結果、宇田型甕は伊勢湾沿岸地域からの搬入品で、型式としては宇田型甕1類に対応し、編年上では松河戸Ⅱ式(赤塚 1994, 赤塚・早野 2001)、中1期から中2期(早野 2011)に比定されると理解した。以下、型式の特徴と型式比定の根拠について記述する。

宇田型甕、あるいはS字甕の型式の識別については、口縁部の形状が第一義的な指標となる。つまり、破片資料であっても、口縁部が残存していれば、型式の識別は比較的容易である。大釜館遺跡の個体は、器壁が体部から口縁部にかけて一様に厚く、口縁部外面の段は消失するも、内面に段を残す。この特徴は、宇田型甕としては初期の所産であることを示す。つまり個体は、宇田型甕1類(または2類)に比定される。

体部上半には、粗く深いハケ調整が施され、体部最大径近くの部位から、ハケ調整は羽状に施されていることが確認される。このような器面のハケ調整は、宇田型甕通有の調整痕である。なお、宇田型甕1類はS字甕D類(新段階)と併存するが、同時期のS字甕D類新段階には、S字甕独特の羽状に施されるハケ調整が乱れた個体が多い一方、宇田型甕には整った個体が多い。体部下半から脚台付近にかけては、ハケ調整が省略される傾向にあるが、このような調整



第2図 大釜館遺跡出土の宇田型甕

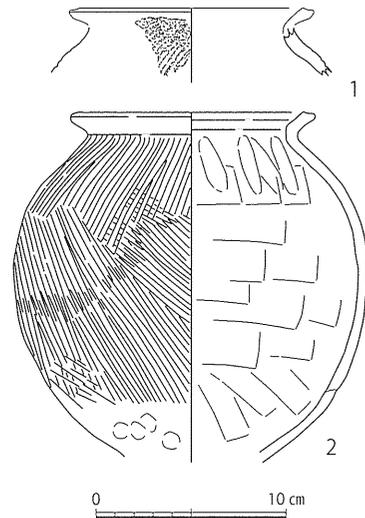
手法も宇田型甕にしばしば認められる。ただし、このような傾向は宇田型甕2類以降に顕著であるような印象がある。

脚台部には、内面に粘土が充填されていることが観察される。この技法はS字甕に通常のいわゆる「補充技法」が、宇田型甕の段階に至っても形骸化しつつ残存したものと思われる。なお、脚台部は下半が欠失し、破断面は幾分、摩耗しているようにも見受けられる。同様の欠失、摩耗の状況は同時期の伊勢湾沿岸地域の台付甕にも認められる場合がある。その他、体部外面には煤が付着し、煮炊具としての使用状況を示す。また、体部には焼成後の穿孔がある。

上記の型式的特徴を踏まえ、およそ松河戸Ⅱ式にS字甕D類（新段階）と宇田型甕1類が併存し、宇田Ⅰ式に宇田型甕2類が認められることからすると、大釜館遺跡出土の宇田型甕の編年上の位置は、松河戸Ⅱ式～宇田Ⅰ式（中1期から中2期）にほぼ特定される。なお、松河戸Ⅱ式～宇田Ⅰ式は、須恵器編年ではTG232型式～TK216型式が対応し、暦年代としては5世紀前半に相当する。

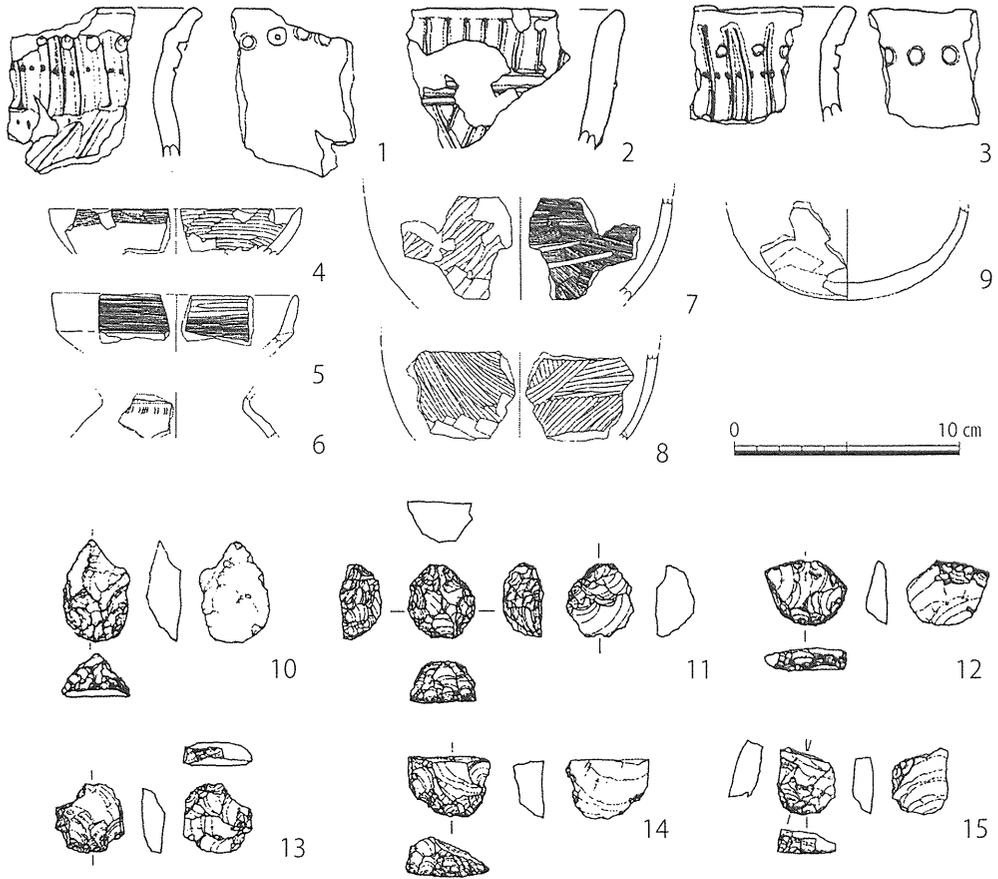
3. 宿田遺跡の続縄文・古墳時代の遺物

大釜館遺跡から約5km下流の盛岡市宿田遺跡（第4次発掘調査）においては、遺構外から宇田型甕またはS字甕（第3図1）、北大Ⅰ式の続縄文土器（第4図1～3）、南小泉式の土師器（同4～9）、湯ノ倉産黒曜石製石器（同10～15）が出土している。調査において同時期の遺構は検出されていないが、これらの遺物は土墳墓に伴っていた可能性が考えられるという。宇田型甕またはS字甕は、頸部よりやや下位の小片で、表土から出土したこともあって、破片の残存状況は必ずしも良好ではない。しかし、独特な粗く深いハケ調整からは、宇田型甕あるいはS字甕であることが断じられる。残存する破片からは、S字甕か宇田型甕かのいずれかを断定するのはやや困難であるが、頸部が強いヨコナデによって緩やかに屈曲し、D類以前のS字甕の頸部に特徴的に認められるヘラ状工具による沈線が完全に消失している特徴に加えて、質感や調整の全体的特徴をも勘案し、消極的ながらも宇田型甕の可能性がより高いと判断した。また、器壁の厚さと推定される頸部径からは、各段階における通有の法量の宇田型甕にしばしば伴う口径12cm前後の小型の法量の甕が想定される。より詳細には、小型の宇田型甕は宇田型甕3～4類の段階により多く認められるが、それらは、比較的薄くて整った作りの個体が多いという印象からすると、宿田遺跡



1. 宿田遺跡 2. 志賀公園遺跡 SU11

第3図 宿田遺跡の宇田型甕と類似例



1～3. 北大Ⅰ式土器 4～9. 土師器 10～15. 湯ノ倉産黒曜石製石器

第4図 宿田遺跡出土の古墳時代の遺物

の宇田型甕は、宇田型甕1～2類の可能性がより高いと思われる。このことは、大釜館遺跡に宇田型甕が搬入される状況とも調和的である。なお、参考となる個体として、宇田Ⅰ式2段階に対比される愛知県名古屋市志賀公園遺跡土器集積 SUII 出土の小型の宇田型甕を例示した(第3図2)。

北大Ⅰ式の続縄文土器(第4図1～3)は口縁部から頸部にかけてわずかにくびれる形状で、口縁部先端の断面は方形に近い。口縁部直下からは微隆起線文が施され、1, 3は外面からの刺突列(突瘤文)が施される。北大Ⅰ式は型式の単位が明確に示された一方で、実体に即した細分は困難とされる(榊田2009)。宿田遺跡の続縄文土器についても、「北大Ⅰ式」とする理解に留めておくのが穏当であろう。

IV. 考察

1. 東日本における宇田型甕の搬出状況について

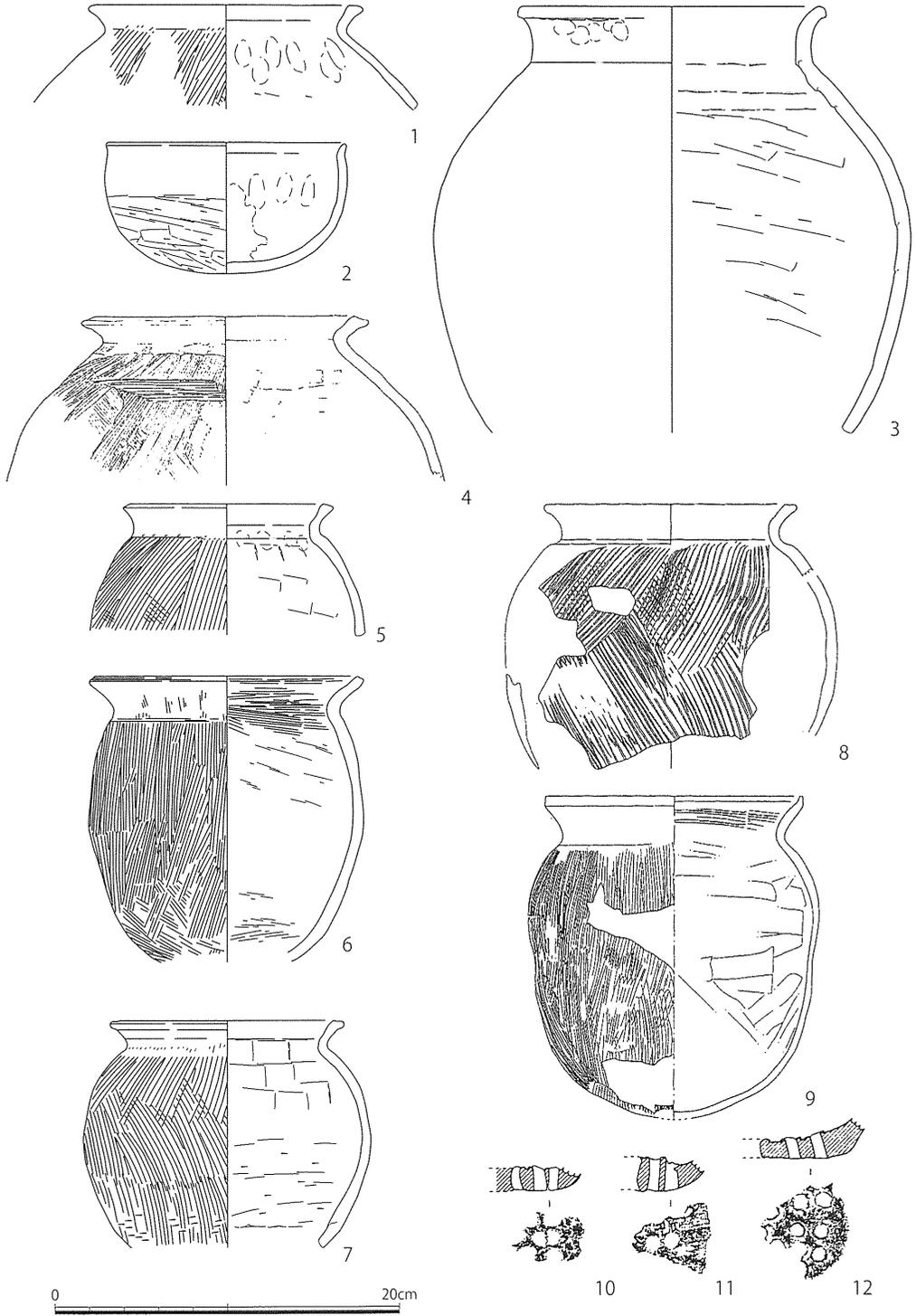
東北地方北部においては、土師器がまとまって出土する古墳時代前・中期の集落遺跡はごく少なく、宇田型甕の出土が特異な現象であることは明らかである。関東地方を含めた東日本においても、宇田型甕の出土状況は十分に把握されていないが、過去に埼玉県児玉郡美里町樋之口遺跡 10 号住居、東京都日野市南広間地遺跡第 1 号流路、神奈川県秦野市根丸島遺跡 329 号住居出土の宇田型甕が集成されている（第 6 回東海埋蔵文化財研究会実行委員 1989）。現在に至っても、千葉県木更津市大山台遺跡（請西遺跡群）、同市原市原 1 号墳下層遺構（10 号住居）、同我孫子市日秀西遺跡 080C 住居、神奈川県秦野市下大槻峯遺跡 SP007 等の出土事例が追加される程度で、東日本における宇田型甕の出土はごく限定される。

これらの宇田型甕はいずれも伊勢湾沿岸地域からの搬入品と推断され、およそ原 1 号墳下層遺構（10 号住居）と大山台遺跡の宇田型甕が 1 類（松河戸Ⅱ式）、他の遺跡の宇田型甕は 3～4 類（宇田Ⅱ式～儀長式）に対比される。なお、後者は小型品が多い（第 5 図）。

原 1 号墳下層遺構（10 号住居）の宇田型甕（第 5 図 1）には丸底鉢等が共伴し（同 2・3）、和泉式前半、御林跡遺跡Ⅱ期（木對 2008）と松河戸Ⅱ式（中 2 期）が併行することを示す¹⁾。御林跡遺跡Ⅱ期が ON231 号型式期～濁り池型式期との対応が想定されていることも大きな齟齬はない。なお、下層遺構の住居は全長 114m の前方後円墳である姉崎二子塚古墳の造営に関連するとも示唆されている（白井 2011）。また、大山台遺跡（同 4）については、遺跡が含まれる請西遺跡群中の千束台遺跡において、鉄鋌状の板状品や鉄製模造品を含む大量の鉄製品を伴う土器集積祭祀遺構が検出されていることが想起される。つまり、宇田型甕 1 類の搬入が東日本における大型前方後円墳の造営、鉄器製作を象徴化した儀礼の受容に関係していた可能性も推測される。

参考までに伊勢湾沿岸地域周辺における宇田型甕の出土事例を引くと、静岡県浜松市梶子遺跡の伊場大溝Ⅷ層において鑄造鉄斧が共伴する事例、和歌山県和歌山市西庄遺跡において鉄鋌が同一地区で共伴する事例に加えて、「物部氏」の拠点とされる奈良県天理市布留遺跡、「葛城氏」の拠点とされる同御所市南郷遺跡群等におけるまとまった出土が特徴的である。さらに、多数の鍛冶遺構が検出されている兵庫県南あわじ市雨流遺跡、百舌鳥古墳群造営に関連するとされる大阪府堺市浅香山遺跡と同陵南北遺跡、太田茶白山古墳などに埴輪を供給した同高槻市新池埴輪製作遺跡における出土が想起される。つまり、宇田型甕が搬入される遺跡は、鉄器製作を含めた各種手工業生産、大型前方後円墳の造営を中心とする国家的事業、あるいは王権や有力氏族との関連が推測される場合が多い。その他、奈良県高市郡明日香村山田道遺跡、滋賀県長浜市柿田遺跡、同東近江市堂田遺跡等、陶質土器や韓式系土器を中心とする渡来系文物が出土している遺跡を多く挙げることができる。

一方、日秀西遺跡（第 5 図 5）、下大槻峯遺跡（同 7）、南広間地遺跡（同 8）、根丸島遺跡における宇田型甕 3～4 類の出土については、南広間地遺跡 1 号流路において 6 世紀後半の伊勢



1～3. 原1号墳下層(10号住居) 4. 大山台遺跡 5. 日秀西遺跡080C住居 6. 日秀西遺跡045E住居 7. 下大槻釜遺跡SP007 8.～12 南広間地遺跡1号流路

第5図 関東地方出土の宇田型甕の諸例と関連資料

型甕（同9）が共伴し、日秀西遺跡においても6世紀末葉の伊勢型甕が出土しているように（同6, 上村2000）、武蔵国府・国分寺周辺域を中心とする武蔵地域、房総地域や相模地域に断続的に搬入される伊勢型甕（高橋1999, 村上2003, 印旛郡市文化財センター2006, 永井2010）を含めた理解が必要である。また、日秀西遺跡において古代の倉庫群、下大槻峯遺跡において東海道の枝道ともされる古代の官道が検出され、両遺跡からは鉄製品が豊富に出土しているように、これらの宇田型甕の出土は関東地方における公的施設、または有力な古代集落の形成の端緒となった可能性がある。さらに、南広間地遺跡1号流路に関東地方においては希少な多孔甕（同10～12）が共伴していることも興味深い。

2. 続縄文土器との併行関係

以下、東北地方北部における宇田型甕の出土の意義、背景を相対化する目的で、主として東北地方における続縄文土器の出土状況を参照しつつ、古墳時代各時期における続縄文土器と土師器の併行関係を通覧する。東北地方北部における弥生時代後期後葉の土器型式として設定されている赤穴式、あるいは東北地方南部の塩釜式・南小泉式・引田式・住社式・栗田式の土師器と、後北C2D式・北大式の続縄文土器との併行関係については、すでに多くの論者によって論じられているが（石井1994, 阿部1999, 木村1999, 榊田2009など）、なお不確定な部分も少なくない。これは、同時期の東北地方北部において、明確な古墳時代の集落が形成されず、土器が安定して出土しないことに起因する。以下、各遺跡における続縄文土器の出土状況について各論者が述べることを参考として、併行関係の大略を把握する。併行関係の把握に際しては、東海地方の編年（赤塚1990・1994・1997, 赤塚・早野2001, 早野2011）に加えて、主として東北地方の塩釜式の編年（青山2010）と古墳時代中期の土師器編年（高橋1999）、畿内地方の纏向編年（関川1976）、庄内・布留式の編年（西村2008）と古墳時代中・後期の土師器編年（辻1999）、北陸地方の漆町編年（田嶋1986・2008・2009）を参照した。なお、各編年の対応関係は以前に提示したもの（早野2011）を改更し、第1表に示した。

後北C1式の最終末段階または後北C2D式の最古段階については、新潟県柏崎市内越遺跡1号住居址において後北C1式または後北C2D式が出土する事例、同村上市山元遺跡30T濠5において後北C1式またはその影響が濃厚な土器に（狭義の）天王山式に後続する東北系土器が共伴する事例が知られている。内越遺跡1号住居址、あるいは天王山式に後続する東北系土器には、漆町2群（法仏式後半）の北陸系土器が共伴することから、後北C1式の最終末段階または後北C2D式の最古段階は、東海における廻間I式0・1段階（早1期）、畿内における庄内式以前（弥生時代後期後半）に併行することが想定される。また、東北北部の赤穴式に先行する湯舟沢式は概ね天王山式に後続する段階に対比されることから（石川2001）、湯舟沢式から赤穴式への移行もほぼ同時期と考えられる。

後北C2D式の中段階、一般的な後北C2D式（大沼1989）については、青森県五所川原市隠川遺跡、秋田県能代市寒川II遺跡第2号土壙墓、岩手県九戸郡九戸村長興寺I遺跡第68号

土坑、同盛岡市安倍館遺跡 RD030、同永福寺山遺跡、宮城県石巻市新金沼遺跡第 15 号住居等の事例から、塩釜式（相当）の古段階、塩釜 1 式が併行し、赤穴式の後半から終末の段階、薦ヶ長根Ⅳ・小井田Ⅳ段階（齋藤 2007）が重複することが知られる。なお、塩釜式の古段階、塩釜 1 式は東海の廻間Ⅱ式 4 段階・廻間Ⅲ式 1 段階（前 1 期）、畿内の布留式古段階、北陸の漆町 7 群に併行する（青山 2010）。また、新潟県新潟市南赤坂遺跡 1 号住居等の事例から、後北 C2D 式の中段階、一般的な後北 C2D 式は漆町 8・9 群、東海における廻間Ⅲ式（前 2・3 期）、畿内における布留式中段階までは継続していた可能性が高い。つまり、後北 C2D 式の前半が庄内式、後北 C2D 式の後半が布留式に概ね併行することが想定される。

さらに、寒川Ⅱ遺跡第 2 号土壙墓を指標とする「寒川Ⅱ式」（鈴木 1990）に続十王台式または武田石高式の影響が認められることから（鈴木 1995、齋藤 2011）、赤穴式の後半から終末の段階と後北 C2D 式の中段階には、十王台式の最終段階、続十王台式または武田石高式、武田式石高段階（鈴木 2005・2008）が対応する。なお、続十王台式または武田石高式、武田式石高段階は、茨城県ひたちなか市武田石高遺跡第 5 号住居における土師器の出土状況から、東海の廻間Ⅱ式 4 段階前後（早 5 期から前 1 期）が併行し、それに後続する同日上市吹上遺跡第 3 号住居は S 字甕を含む土師器から、廻間Ⅲ式前半（前 1 期から前 2 期）に、福島県双葉郡浪江町本屋敷古墳群第 2 号住居は北陸北東部の甕に類似する個体の出土から²⁾、漆町 7 群から 8 群（前 1 期から前 2 期に併行）に対応する。つまり、十王台式などを含めた土器の動態を含めて、上記に想定した併行関係は概ね整合することが確かめられる。

後北 C2D 式に後続する北大Ⅰ式については、大釜館遺跡と宿田遺跡の事例から、北大Ⅰ式が南小泉式（相当）、松河戸Ⅱ式の前後（中 1 期から中 2 期）、TK216 型式期以前に併行することが推定される。ただし、東北地方における北大Ⅰ式の出土事例は後北 C2D 式に比して減少すること、あるいは北大Ⅰ式の型式の新古は明確でないことから（榊田 2009）、北大Ⅰ式の上限と下限の年代、北大Ⅰ式が保有する時間幅を画定することは困難である³⁾。北大Ⅱ式については、青森県森ヶ沢遺跡土壙墓群、同田向冷水遺跡 SI-1 等の事例から、北大Ⅰ式の新段階から北大Ⅱ式が概ね引田式（相当）に併行することが推定される。

以上、出土状況は不安定ながら、大釜館遺跡と宿田遺跡の宇田型甕が南小泉式相当の土師器と北大Ⅰ式の続縄文土器と共存すると推定したことは、前後の時期における弥生土器・土師器と続縄文土器の出土状況、各地域間における併行関係の理解に照らした場合においても概ね整合することが確かめられる（第 1 表）。

V. まとめ

前節の後段において把握した併行関係を前提として、続縄文土器文化圏における宇田型甕出土の背景と意義を相対化し、小文のまとめとしたい。

弥生時代後期後半または古墳時代早期前半、庄内式以前の段階の東北地方においては、日本海側を中心として、天王山式系土器と北陸系土器が相互に接触し、この動態に後北 C1 式最終

末から後北 C2D 式の最古段階の続縄文土器も関与した形跡がある。ほぼ同時期の東海地域においても、隣接地域間相互の緊密な関係性を背景として、「廻間式土器」が成立する。

古墳時代早期後半、東日本各地には東海系、北陸系土器が拡散し、畿内においては庄内式が成立する。続く古墳時代前期前半、庄内式新段階から布留式古段階においては、後北 C2D 式中段階の続縄文土器が東北地方の広域に分布し、十王台式土器も東北北部にまで影響を及ぼすようになる。この段階において、畿内には布留式が成立し、東海系土器は東西に広く拡散する。

古墳時代中期前半、南小泉式の段階における東北地方には北大 I 式の続縄文土器が分布し、ごくわずかながら伊勢湾沿岸地域から宇田型甕が搬入される。前代の東海系土器、北陸系土器などとは異なり、宇田型甕は各地において模倣の対象とはならなかったことからすると、出土した宇田型甕は、直接的な人的移動、交渉を示す物的証拠である可能性が高い。

寒川Ⅱ遺跡の土壌墓から出土した鉄製品が象徴的に示すように、弥生時代後期から古墳時代前期の東北地方における続縄文土器の分布、あるいはそれに呼応するかのような天王山式系土器、十王台式土器の動態には鉄器を始めとする物資流通が重ね合わせられることが多い。一方、古墳時代中期の各地における宇田型甕の出土状況を踏まえると、大釜館遺跡出土の宇田型甕についても、主として鉄器が関係する技術拡散、物資流通が付随していたことが推測される。

古墳時代中期は大型古墳の築造に刺激されつつ、列島規模で産業構造の変革が進行する。古墳時代中期後半には、北上川中流域においても、方形区画を伴う本格的な古墳時代集落である岩手県奥州市中半入遺跡、豊富な形象埴輪群を含む列島最北端の前方後円墳である同角塚古墳が顕現する。これらより以前、以北の古墳時代中期前半、北上川上流域にもたらされた大釜館遺跡の宇田型甕は、古墳時代中期における構造変革の初動に位置し、北方交流史により広域的、動的な視点が必要であることを示唆している。

VI. おわりに

小文作成の発端は、2007年10月19日、滝沢村埋蔵文化財センターに資料調査に訪れた羽柴直人氏より、大釜館遺跡の宇田型甕が搬入品の可能性があるとの指摘を受け、古屋紀之氏に遺物を実見して頂いた結果、古墳時代の「東海系土器」の可能性があるとのご教示を得たことによる。それを受けた井上は、2008年1月25日に愛知県埋蔵文化財センターに遺物を持参し、赤塚次郎氏と早野が実見した結果、伊勢湾沿岸地域で製作された宇田型甕であるという結論に至った。井上と早野は改めて遺物を詳細に報告する意を得たものの、2011年3月11日の東日本大震災の影響もあって、報告する機会を逸したままとっていた。また、2009年・2010年には、社団法人日本アイソトープ協会滝沢研究所仁科記念サイクロロンセンターにおいて胎土分析も実施しているが、比較試料の蓄積と分析結果の解析が不十分で、今回はその結果を反映させることができなかった。このような至らない小文に誌面を提供して下さった筑波大学考古学研究室の諸兄、小文作成の過程においてご高配を頂いた下記の諸氏、諸機関には心より感謝申し上げます。

なお、本研究は平成21・22年度社団法人日本アイソトープ協会滝沢研究所研究助成金「PIXEによる滝沢村出土土器の胎土分析」による成果の一部を含む。

滝沢村埋蔵文化財センター 盛岡市教育委員会・盛岡市遺跡の学びの館 雫石町教育委員会
日立市郷土博物館 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター 千葉県文化財センター・千葉県立
房総のむら 市原市埋蔵文化財調査センター 神奈川県埋蔵文化財センター 浜松市 愛知県
埋蔵文化財調査センター 稲沢市教育委員会 東海市教育委員会
青山博樹 赤塚次郎 吾妻俊典 猪狩俊哉 井口智博 稲田健一 折原繁 神原雄一郎 木對
和紀 木村高 齋藤瑞穂 櫻井友梓 柴田慈幸 菅原祥夫 鈴木一有 鈴木信 鈴木素行 仙
庭伸久 滝沢規朗 田嶋明人 立松彰 田中清美 田中裕 豊田宏良 西川修一 羽柴直人
古屋紀之 北條献司 宮澤浩司 村田淳 余合昭彦

註

- 1) 前後の時期を含めると、和泉式初期の御林跡遺跡Ⅰ期が松河戸Ⅰ式4段階～Ⅱ式1段階(中Ⅰ期)、Ⅱ期が松河戸Ⅱ式1～2段階(中Ⅱ期)、和泉式最盛期のⅢ期・Ⅳ期(TK73～TK216型式期に対応)が宇田Ⅰ式(中Ⅲ期)、和泉式から鬼高式への移行期のⅤ期・Ⅵ期(TK208型式期に対応)が宇田Ⅱ式1段階(中Ⅳ期)に併行することが類推される。また、Ⅳ期とされる御林跡遺跡144号遺構出土の外面にハケ調整を施した甕が、尾張地域などにおいて宇田Ⅰ式(中Ⅲ期)に散見する甕に類似することも調和的である。
- 2) 本屋敷古墳群第2号住居出土の北陸北東部系の甕に類似する個体が、漆町8群に相当する新潟県村上市下新保高田遺跡S11307において出土していることを田嶋明人氏よりご教示頂いた。
- 3) 後北C2D式の下限と北大Ⅰ式の上限については、宮城県栗原市伊治城跡SD260・261における塩釜3式の土師器と北大Ⅰ式の続縄文土器の出土、同仙台市鴻ノ巣遺跡SD26、同多賀城市山王遺跡SX058における南小泉式の土師器と後北式C2D式新段階(または北大Ⅰ式)の続縄文土器の出土から、後北C2D式の最終末段階が南小泉式前半に併行するという理解も示されているが(工藤2004)、これらの遺構における共伴を疑問視する向きもある(榎田2009など)。

参考文献

- 青山博樹 2010 「古墳時代前期の土器編年—仙台平野とその周辺—」『北社—辻秀人先生還暦記念論集—』
辻秀人先生還暦記念論集刊行会 17-36頁。
- 赤塚次郎 1988 「最後の台付甕」『古代』第86号 早稲田大学考古学会 207-214頁。
- 赤塚次郎 1990 「廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 財団法人愛
知県埋蔵文化財センター 50-109頁。
- 赤塚次郎 1994 「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集 財
団法人愛知県埋蔵文化財センター 84-103頁。
- 赤塚次郎 1997 「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第73集 財
団法人愛知県埋蔵文化財センター 79-95頁。
- 赤塚次郎・早野浩二 2001 「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』第2号 財団法人愛知県教育サービ
スセンター愛知県埋蔵文化財センター 13-32頁。

- 阿部義平 1999 『蝦夷と倭人』 青木書店.
- 石井 淳 1994 「東北地方北部における続縄文土器の編年的考察」『筑波大学先史学・考古学研究』第5号 筑波大学歴史・人類学系 32-55 頁.
- 石川日出志 2001 「弥生後期湯舟式土器の系譜と広がり」『北越考古学』第12号 北越考古学研究会 11-32 頁.
- 印旛郡市文化財センター 2006 『ウチの土器・ヨソの土器—古代印旛の須恵器と生産—遺物集成』.
- 上村安生 2000 「宇田型甕衰退期から伊勢型甕成立過程についての基礎的研究」『S字甕を考える』第7回東海考古学フォーラム三重大会事務局 190-239 頁.
- 大沼忠春 1989 「続縄文式土器様式」『縄文土器大観4 後期・晩期・続縄文』小学館 357-360 頁.
- 木對和紀 2008 「御林跡遺跡における5世紀代の土器変遷」『市原市御林跡遺跡Ⅱ』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第5集・上総国分寺台遺跡調査報告ⅩⅧ 市原市教育委員会 538-558 頁.
- 木村 高 1999 「東北地方北部における弥生系土器と古式土師器の併行関係—続縄文土器との共伴事例から—」『青森県埋蔵文化財センター研究紀要』第4号 青森県埋蔵文化財センター 47-62 頁.
- 工藤哲司 2004 「続縄文土器」『鴻ノ巣遺跡第7次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第280集 仙台市教育委員会 299-304 頁.
- 齋藤瑞穂 2007 「赤穴式対向連弧文土器考」『信濃』第59巻第2号 信濃史学会 111-131 頁.
- 齋藤瑞穂 2011 「十王台式の北漸と赤穴式羽状縄文技法の成立」『東国の地域考古学』六一書房 135-150 頁.
- 榊田朋広 2009 「北大式土器の型式編年—続縄文/擦文変動期研究のための基礎的研究—」『東京大学考古学研究室研究紀要』第23号 東京大学考古学研究室 39-92 頁.
- 白井久美子 2011 「古墳の様相」『研究紀要』27 財団法人千葉県教育振興財団文化財センター 29-114 頁.
- 鈴木正博 1990 「栃木「先史土器」研究の課題(一)」『古代』第89号 早稲田大学考古学会 78-117 頁.
- 鈴木正博 1995 「茨城弥生式の終焉—「続十王台式」研究序説—」『古代』第100号 早稲田大学考古学会 143-201 頁.
- 鈴木素行 2005 「船窪遺跡における十王台式土器の分析—「武田式土器」の変遷—」『船窪遺跡』(財)ひたちなか市文化スポーツ振興公社文化財調査報告第32集 財団法人ひたちなか市文化スポーツ振興公社 76-94 頁.
- 鈴木素行 2008 「「屋内土壙墓」からの眺望—弥生時代後期「十王台式」の埋葬を考えながら—」『地域と文化の考古学Ⅱ』六一書房 443-458 頁.
- 関川尚功 1976 「纏向遺跡の古式土師器—纏向1~4式の設定—」『纏向 奈良県桜井市纏向遺跡の調査』榎原考古学研究所・桜井市教育委員会 433-500 頁.
- 第6回東海埋蔵文化財研究会実行委員 1989 「関東出土の宇田型甕」『断夫山古墳とその時代』愛知考古学談話会 709-716 頁.
- 田嶋明人 1986 「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター 101-186 頁.
- 田嶋明人 2008 「古墳確立期土器の広域編年 東日本を対象とした検討(その1)」『石川県埋蔵文化財情報』第20号 財団法人石川県埋蔵文化財センター 33-59 頁.
- 田嶋明人 2009 「古墳確立期土器の広域編年 東日本を対象とした検討(その2)」『石川県埋蔵文化財情報』第21号 財団法人石川県埋蔵文化財センター 41-67 頁.
- 高橋 誠 1999 「古墳時代後期の畿内系ハケ目甕」『南羽鳥遺跡群Ⅲ』財団法人印旛郡市文化財センター

- 212-220 頁.
- 高橋誠明 1999 「宮城県における古墳時代中期の土器様相」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会 1-20 頁.
- 巽淳一郎 1975 「小結」『宇田遺跡発掘調査報告書』岐阜市教育委員会 25-27 頁.
- 辻 美紀 1999 「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室 10 周年記念論集—』大阪大学考古学研究室 351-365 頁.
- 永井宏幸 2010 「土器の生産と流通」『愛知県史』資料編4 考古4 飛鳥～平安 愛知県 748-765 頁.
- 西村 歩 2008 「中河内地域の古式土師器編年と諸問題」『シンポジウム「邪馬台国時代の摂津・河内・和泉と大和」資料集』香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館 1-42 頁.
- 早野浩二 2011 「東海」『古墳時代の考古学1 古墳時代史の枠組み』同成社 95-108 頁.
- 村上吉正 2003 「甕から見た遠隔地交流—古代東国における外来系土師器甕の検討—」『神奈川考古』第39号 神奈川考古同人会 219-260 頁.

遺跡文献

[北海道]

柏木 B 遺跡：恵庭市教育委員会 1981 『柏木 B 遺跡』.

[青森県]

隠川遺跡：青森県教育委員会 1999 『隠川（11）遺跡Ⅰ・隠川（12）遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第260集.

田向冷水遺跡：八戸市教育委員会 2006 『田向冷水遺跡Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第113集.

森ヶ沢遺跡：国立歴史民俗博物館 2008 『[共同研究] 北部日本における文化交流—続縄文期寒川遺跡・木戸脇裏遺跡・森ヶ沢遺跡発掘調査報告（上）・（下）』国立歴史民俗博物館研究報告第143・144集.

[秋田県]

寒川Ⅱ遺跡：秋田県教育委員会 1988 『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ—寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ遺跡—』秋田県文化財調査報告書第167集.

田久保下遺跡：秋田県教育委員会 1992 『秋田ふるさと村（仮称）建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書—富ヶ沢 A・B・C 窯跡・田久保下遺跡・富ヶ沢1号～4号塚—』秋田県文化財調査報告書第220集.

[岩手県]

仁沢瀬Ⅱ遺跡：財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1993 『仁沢瀬遺跡群発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第185集.

中半入遺跡：財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002 『中半入遺跡・蝦夷塚古墳発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第380集.

長興寺Ⅰ遺跡：財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002 『長興寺Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第388集.

永福寺山遺跡：盛岡市教育委員会 1997 『永福寺山遺跡—昭和40・41年度発掘調査報告書—』.

安倍館遺跡：盛岡市教育委員会 1999 『安倍館遺跡—厨川城跡の調査—』.

宿田遺跡：盛岡市教育委員会 2002 「宿田遺跡（第4次調査）」『盛岡市内遺跡群—平成13年度発掘調査概報—』4-38 頁.

盛岡市教育委員会 2008 「宿田遺跡（第11次調査）」『盛岡市内遺跡群—平成18・19年度発掘調査概報—』

37-47 頁.

高柳遺跡：滝沢村教育委員会 1987 『高柳遺跡』岩手県滝沢村文化財調査報告書第7集.

大石渡遺跡：滝沢村教育委員会 1993 『大石渡遺跡』岩手県滝沢村文化財調査報告書第24集.

大釜館遺跡：滝沢村埋蔵文化財センター 2003 『大釜館遺跡』滝沢村埋蔵文化財センター調査報告書第1集.

仏沢Ⅲ遺跡・大石渡Ⅴ遺跡：滝沢村埋蔵文化財センター 2008 『仏沢Ⅲ遺跡』滝沢村埋蔵文化財センター調査報告書第3集.

角塚古墳：胆沢町教育委員会 2002 『角塚古墳発掘調査報告書』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第28集.
[宮城県]

鴻ノ巣遺跡：仙台市教育委員会 2004 『鴻ノ巣遺跡 第7次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書.

山王遺跡：多賀城市 1999 『多賀城市史』第4巻 考古資料.

新金沼遺跡：石巻市教育委員会 2003 『新金沼遺跡』石巻市文化財調査報告書第11集.

伊治城跡：築館町教育委員会 1992 『伊治城跡』築館町文化財報告書第5集.

[福島県]

本屋敷古墳群：法政大学文学部考古学研究室 1985 『本屋敷古墳群の研究』法政大学.

[新潟県]

内越遺跡：新潟県教育委員会 1983 『内越遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第33.

山元遺跡：新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2009 『県内遺跡発掘調査報告書Ⅰ 山元遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第199集.

下新保高田遺跡：新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2010 『下新保高田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第218集.

南赤坂遺跡：巻町教育委員会 2002 『南赤坂遺跡—縄文時代前期～中期・古墳時代前期を主とする集落跡の調査—』.

[茨城県]

吹上遺跡：日立市教育委員会 1981 『久慈吹上』日立市文化財報告第8集.

武田石高遺跡：財団法人ひたちなか市文化スポーツ振興公社 1999 『武田石高遺跡 古墳時代編』(財)ひたちなか市文化スポーツ振興公社文化財調査報告第32集.

[千葉県]

日秀西遺跡：千葉県教育委員会・財団法人千葉県文化財センター 1980 『千葉県我孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書』.

原1号墳下層：原遺跡調査会 1984 『原遺跡』.

御林跡遺跡：市原市教育委員会 2008 『市原市御林跡遺跡Ⅱ』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第5集.

大山台遺跡：木更津市教育委員会 1987 『請西遺跡群確認調査報告書』.

千束台遺跡：木更津市教育委員会 2008 『千束台遺跡Ⅰ—祭祀遺構—』.

[東京都]

南広間地遺跡：日野市・日野市遺跡調査会 1988 『南広間地遺跡Ⅰ』.

落川遺跡：日野市落川遺跡調査会 1997 『落川遺跡』.

[神奈川県]

下大槻峯遺跡：財団法人かながわ考古学財団 1999 『下大槻峯遺跡 (No.30) Ⅲ』かながわ考古学財団調査報告 53.

[静岡県]

梶子遺跡：財団法人浜松市文化振興財団 2012 『梶子遺跡 13 次』.

[愛知県]

志賀公園遺跡：財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター 2001 『志賀公園遺跡』
愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 90 集.

[滋賀県]

柿田遺跡：滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1989 『柿田遺跡発掘調査報告書』.

長浜市教育委員会 1999 『墓立遺跡・柿田遺跡・正蓮寺遺跡』長浜市埋蔵文化財調査資料第 25 集.

堂田遺跡：滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1988 『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 XV-3』.

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1989 『堂田・市子遺跡 (2)』ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 XVI-5.

[奈良県]

山田道遺跡：奈良国立文化財研究所 1991 「山田道第 2・3 次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 21』
40-52 頁.

南郷遺跡群：

奈良県立橿原考古学研究所 1996 『南郷遺跡群Ⅰ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 69 冊.

奈良県立橿原考古学研究所 1999 『南郷遺跡群Ⅱ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 73 冊.

奈良県立橿原考古学研究所 2003 『南郷遺跡群Ⅲ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 75 冊.

奈良県立橿原考古学研究所 2000 『南郷遺跡群Ⅳ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 76 冊.

奈良県立橿原考古学研究所 2000 『南郷遺跡群Ⅴ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 77 冊.

奈良県立橿原考古学研究所 2007 『極楽寺ヒビキ遺跡』奈良県文化財調査報告書第 122 集.

布留遺跡：

埋蔵文化財天理教調査団 1995 『布留遺跡三島 (里中) 地区発掘調査報告書』.

埋蔵文化財天理教調査団 1996 『布留遺跡布留 (西小路) 地区古墳時代の遺構と遺物』考古学調査研究
中間報告 19.

埋蔵文化財天理教調査団 2006 『布留遺跡豊井 (宇久保) 地区発掘調査報告書』考古学調査研究中間報
告 24.

[大阪府]

新池埴輪製作遺跡：高槻市教育委員会 1993 『新池』高槻市文化財調査報告書第 17 冊.

浅香山遺跡：堺市教育委員会 1997 「浅香山遺跡」『堺市文化財調査概要報告』第 63 冊.

陵南北遺跡：平松良雄 1993 「宇田型台付甕型土器に関する検討」『関西大学考古学研究室開設四拾周年
記念考古学論叢』関西大学 289-322 頁.

[和歌山県]

西庄遺跡：財団法人和歌山県文化財センター 2003 『西庄遺跡』.

[兵庫県]

雨流遺跡：兵庫県教育委員会 1990 『雨流遺跡』兵庫県文化財調査報告第 79 冊.

A study of the Uda-type jars recovered from Ogamadate site,
Takizawa, Iwate prefecture

INOUE, Masataka and HAYANO, Koji

This paper studies in detail the Uda-type jars recovered from Ogamadate site, Takizawa-mura, Iwate-gun, Iwate prefecture. It is believed that the Uda-type jars, which are classified into Matsukawado II type ware in the Tokai region, were imported from the Ise-wan coastal area. Although only few examples of the Uda-type jars are so far known in eastern Japan, it is likely that they were transported along with the eastward diffusion of new technology and other products, which occurred in the early phase of the middle Kofun period. The study of Epi-Jomon pottery, Yayoi pottery and Hajiki ware in the Tohoku area, which coexist with the Uda-type jars, demonstrates Matsukawado II type is contemporary with Hokudai I type and the Minamikoizumi type of Epi-Jomon pottery. The Uda-type jars from Ogamadate site carry significant information for understanding the early phase of the middle Kofun period in the north Tohoku area.